

三橋淳、KTM でダカール・ラリーに挑戦！

ダカール・ラリーにおける現役の四輪市販車クラスチャンピオンにして世界的なラリースト、三橋淳（みつはし・じゅん）。オフロードに限らず、モーターファンの間で広く知られるビッグネームが、KTM と組み、再びダカール・ラリーに挑戦します。

<ポイント>

- ・2015年のダカール・ラリーで市販車クラスを制した『三橋淳』が、2016年は二輪車で世界一過酷なラリーに挑戦。
- ・過去、四輪で成功したプロフェッショナル・ドライバーが二輪に挑戦し成功した例は皆無。もちろん日本人としては初のコンバート。
- ・南米に舞台を移して以降、ますます過酷になったダカール・ラリーの舞台で、日本人ライダーはだれも完走していない。初の完走を目指す。
- ・三橋選手がパイロットするのは「KTM 450 Rally Replica」。ダカール・ラリーで生まれ、ダカールを制するために作られ、ダカールを14年連続勝ち抜いてきたKTMが誇るファクトリーラリーマシンの市販版。
- ・三橋選手をサポートするのはKTMのセミファクトリーチーム、「Orlen Team」とKTMフルシャワラリーチーム。KTM Japanの支援で専任のメカニックを用意し抜群の体制で挑戦する。
- ・チャレンジのテーマは、「モーターサイクルの仲間とともに、フィニッシュラインを目指す」。裸一貫からのリスタートに、サポーターからの支援が欠かせない。そのためのクラウドファンディングも開始する。

ストリートからオフロードまで幅広くスポーツモーターサイクルをリリースしモータースポーツの楽しみを広げているKTM（KTM JAPAN 株式会社：03-3527-8885）は、プロフェッショナル・ラリー・ドライバーであり、2015年のダカール・ラリーでは市販車クラスを制した三橋淳（みつはし・じゅん）と組み、2016年度のダカール・ラリーに挑戦します。

三橋選手は、2015年の優勝後、チームとの契約を終了。しかし、これまで人生をかけてきたダカール・ラリーをこのままでは終われない、と新しい挑戦の機会を探していました。とはいえ、市販車クラスでは敵なしとまで言われた三橋選手にとって、ファクトリー・マシンとファクトリー体制以外での挑戦はリスクばかりで魅力がなかったのも事実。レースへの挑戦に気持ちが切れかけていたときに、KTMとの可能性が差し伸べられました。4月、エイプリル・フールの冗談でKTMで走る、というネタを流した後も、KTMとなら組める、モーターサイクルでのチャレンジなら今までにない夢を掴むことができると確信した三橋選手。改めてKTM JAPANとのブリッジがつながり、その実績と、KTM本国と深いつながりのあるKTM JAPANの強いプッシュから、今年の参戦への道が開ける



【三橋 淳】

プロフェッショナル・クロスカンントリー・ドライバー。2004年から日産、トヨタと日本のチームでダカール・ラリーに挑戦し、2015年を含む5度の市販車クラスでの優勝を誇る。2001-2003年にはモーターサイクルでもダカールラリーを走っており、2002年にはベスト・プライベート賞を獲得。三橋の前にはKTMのエントラントしかいない、という状況を走りぬいた経験もある。オートバイ専門誌の編集者の経験もあるなど、二輪、四輪全般に造詣が深い。



【KTM 450 Rally Replica】

ダカールの王者、KTMが誇るラリーマシン。市販され、だれにでも購入できる、しかしダカールを完走する力のある世界で唯一のマシン。KTMはツーリングモデルの『アドベンチャー』をはじめ、公道走行可能なラインアップにその経験を生かし、仕上げています。

こととなったものです。

<エントリー受理までの道>

とはいえ、四輪では王者の三橋選手も、過去 10 年以上にわたり二輪での実績は無いも同然。ラリーオーガナイザーである ASO も、三橋選手のモーターサイクルでのエントリー受諾には難色を示し、出走が危ぶまれていました。最終的には、オーガナイザーが指定する国際ラリーを完走し、実力を示すことを条件として、エントリーを認める、というコンテストに挑戦することになったのです。

10 月初旬、急きよ選ばれたコンテスト・ラリーとなったメルズーガ・ラリー。モロッコ・ラリーに続く国際ラリーで、KTM からモロッコを走ったファクトリーチームがそのまま参戦。カミオンや四輪のいない、モーターサイクルとバギーだけのラリーとはいえ、エントリーは優に 100 台を超える規模。砂漠を走るラリーであり、ダカールへのテストの意味もあってファクトリーマシンも多く参加しています。三橋選手は、このラリーに急きよエントリーし、身一つで旅だったのです。

現地で迎えたのは、ダカールでも組むことになる KTM ワルシャワチーム。チームが三橋選手のマシンを用意し、セットアップをすすめます。多少のトラブルはありましたが隣接するファクトリーチームのメカニックも手伝って解決、無事に走り出すことができました。

スポンサーデカールひとつない、真っ白なマシンでのラリー。強豪ひしめくプロクラスでのレースながら、三橋選手はマシンを確実に前へと進めます。序盤は久しぶりのモーターサイクルでのラリーとあってスピードも上がり苦戦しましたが、徐々にペースをつかみ、最終的には総合 14 位での完走を果たしました。ノーペナルティーでの完走はわずか 10 台。KTM ファクトリーチームでさえ完走を阻まれた厳しいラリーで見事に成果を残しました。

チーム・マネージャーのフィリップ＝ダブロフスキーは「三橋は極めて豊かな才能にあふれ、セルフコントロールに長けた、クレバーなラリー手だ。長年モーターサイクルラリーから遠ざかっていたにもかかわらず、高順位をキープし、決して限界を超えることなくラリーをコントロールしてゴールまでマシンを運んでみせた。無意味なリスクを取らずに確実にマシンを走らせる高い能力を持った三橋とこうしてともに働くことができるのは大変な喜びだ」というコメントを残しています。KTM とチームのこうしたサポートの結果、三橋選手のダカールラリーへのエントリーは正式に認められました。



【メルズーガを走り切った三橋】

アマチュアレベルでは走り切れないほどのメルズーガ。KTM のファクトリーライダーさえもリタイヤに追い込まれた厳しいラリーを、三橋は 14 位、ノーペナルティーで完走し、見事にダカールへの扉を開いた。



【メルズーガを走る三橋】

国際ラリーの中では比較的走りやすいとはいえ、砂漠、ガレ場、起伏の大きな地形、わざと困難に設定されたマップとナビゲーションなど、ラリーに期待される要素がすべてこめられていたメルズーガ。ダカールに挑戦するチームがそのテストとしてここを選ぶのも当然といえるだろう。



【KTM ワルシャワラリーチーム】

ポーランドの首都、ワルシャワにある KTM ディーラーを母体とするラリーチーム。KTM 本社と深いつながりを持ち、若手を育成して KTM ファクトリーチームに送り込む役割も持つほか、セミファクトリーのような形でライダーの面倒も見るとも見る。サポートのレベルも高く、ライダーからの信頼も厚い

KTM

<KTM とダカール・ラリー>

ダカール・ラリーは世界で最も過酷なラリーであるとともに、世界中の冒険家が目指す夢とあこがれのラリーでもあります。1979年に第1回が開催され、2016年のラリーは実に第38回目を数えます。この長い歴史の中で、主役の片翼を担うラリーマシンも大きく進化してきました。砂漠に奪われるパワーを補うかのように高性能化の一途をたどったモーターサイクルも、安全性への配慮もあって現在では450ccに排気量制限が設けられています。過去14年間にわたりこのラリーをほぼ独占してきたのがKTMですが、それは単にレースを制することだけが目的ではなく、ラリーによって得られた耐久性へのノウハウ、砂をも掴むトーション、疲れず壊れず信頼性の高いマシンづくりといったフィードバックをお客様に届けるためでもありました。

同時に、KTMはラリーに挑戦するライダーたちのために、コンペティティブなマシンの提供と、ラリーサービスの提供を絶えず行ってきました。KTMの450Rally Replicaはまさにこのダカール・ラリーを戦うために生まれたマシンであり、世界中のラリー・シーンで活躍しているマシンでもあります。トップオフロード・ブランドであるKTMだけが持ち得たノウハウが凝縮されたこのマシンは、他のブランドのモーターサイクルを大改造してラリーマシンに仕上げるよりもはるかに安価に、かつ信頼性の高いマシンとして、世界中から愛されています。くわえて、KTMが提供するラリー・サービスは、有償でエントラントにパーツやテクニカルアシスタンスを提供するものであり、ラリー挑戦への敷居を下げ、ライダーに夢を与えてきました。

<三橋選手の挑戦にむけて>

三橋選手の2016年の挑戦は、こうしたラリー、冒険に懸けるKTMの情熱と、三橋選手のチャレンジ・スピリットが結実したものです。現役のチャンピオンにして、四輪のプロドライバーでありながら、その地位に甘んじることなくチャレンジを続ける三橋選手と、それを応援し、トップレベルのサービスを提供することで、夢を実現しようというKTM。長く不在だった日本人のダカール・ラリーストが生まれ、この先に続くライダーを迎えたい、そんな両者の強い思いがこのプロジェクトにはあります。

とはいえ、海外ラリー、それも頂点のダカールラリーへの挑戦には多額の資金が必要なのも事実。エントリフィーだけでも日本円に換算して約200万円を超えるうえ、安全かつ確実にラリーを乗り切ることのできるマシンづくり、装備や渡航費など、枚挙にいとまのないほどの資金を用意しなくてはなりません。

今回のチャレンジでは、こうした資金を、三橋選手を応援する仲間からも集め、その思いを共に連れて南米のステージに持ち込もう、というクラウドファンディング・プロジェクトも同時に立ち上げられました。もちろんサ



【ダカールでのチーム KTM】

ダカール・ラリーではチャンピオンメーカーとして大きくサポート TENT を展開する KTM ファクトリーチーム。2016 年はファクトリーパイロット（ライダー）として、モロッコ・ラリーを制したサム＝サンダーランドを筆頭に、世界クロスカントリーラリー選手権のチャンピオンを決めたマティアス＝ウォークナー、ベテランのジョルディ＝ヴィラドムとトビー＝プライスがチームを構成。さらに、2015 年のダカール・ラリー優勝者であるマルク＝コマの引退を受け、エンデューロ世界チャンピオンであるアントワン＝メオが加入。さらに 2015 年度のエンデューロ世界選手権ウィメンズクラスのチャンピオンでもあるライア＝サンツも合わせ、6 名のファクトリーライダーを走らせます。KTM は 1994 年から正式にメーカーとしてダカール・ラリーに参戦を開始。2001 年に初めて勝利を飾り、以来 2015 年まで 14 年連続してダカールを制してきました。



【KTM 1190 Adventure】

KTM のダカールラリーでの豊かな経験が結実した市販モデル。KTM ではアドベンチャーと名付けられたモデルを 1050、1190、1290 の 3 つの排気量で展開、それぞれ個性にあふれた 4 モデルを市場に投入しています。なかでも販売の中核となるのがこの 1190 アドベンチャー。圧倒的な軽さと信頼性で人気です。希望小売価格：195 万円。

ポーターには、このプロジェクトならではの特別なリターンも用意されています。加えて、三橋選手がダカールに旅立つ前には壮行会も企画。帰国後には三橋選手が企画するスクールやデモランの機会などへの特別招待も予定されています。サポートプロジェクトの詳細については、以下の URL をご参照ください。

URL: <https://www.makuake.com/project/paridaka/>

<今後のスケジュール>

ラリーに向け、三橋選手は KTM ファクトリーチームとの合同トレーニングに参加します。11 月の中旬からスペインで行われるトレーニングでは、ダカールに向けた実践的なトレーニングを行うことによって、スピードとコントロール力をさらに実践的に上げていく予定です。

12 月初旬には、東京都内で三橋選手のダカールラリー向け壮行会を開催。三橋選手のサポーターとともに、ダカールに向かう前に改めて景気づけを行い、その挑戦に花を添えようという企画です。

三橋選手と KTM のダカール参戦に、ぜひご注目いただきたく、またご支援賜りたくお願い申し上げる次第です。

なお、今回の挑戦について、三橋選手自身のインタビュー映像が公開されます。これも合わせてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。

URL: <https://youtu.be/6WM20CORNlq>

プロジェクトへのご協賛、スポンサーシップなどのお問い合わせは、以下にお願いいたします。

ANIMAL HOUSE / 代表：稲垣正倫

東京都中野区丸山 2-8-22

080-3351-3523

KTM では、このプロジェクト応援のため、継続的にニュースを発信し、またイベントなどを通じて告知を進めてまいります。ご注目ください。



【トレーニング中の三橋選手と 450Rally】

ようやく正式にダカールへの扉を開くことになった三橋選手。KTM 450 Rally との相性は抜群で、トレーニングにも力が入ります。三橋選手は『これは最高のラリーマシンだ。この軽さ、コントロール性、信頼性、装備、どれをとってもすべてラリーには必要不可欠であり、それが当たり前のように用意されているこのマシン抜きにはダカール挑戦はあり得なかった』と語っています。



【三橋選手と KTM JAPAN 代表・野口】

このプロジェクトは、文字通り二人の友情と熱い気持ちで結実して動き出したもの。三橋選手は「KTM の僕に対する信頼、応援と力強い後押しがなければもう一度ダカールを走ることはなかっただろう」と語っています。KTM 野口は「三橋選手でなければ僕らはここまでこの困難なプロジェクトに踏み切りませんでした。彼ほどの資質を備えたラリーリストは決して多くはなく、またフィールドこそ違えど現役のチャンピオンとして尊敬されているドライバーでもあります。我々 KTM が最も力を入れているモータースポーツの一つであるラリーに、日本から選手を送り込むことは我々の悲願でもあり、それをできるのは三橋選手を置いて他にはあり得ませんでした。けれどもこのプロジェクトによってダカールへの扉が開き、海外ラリー、また海外ツーリングといった KTM ならではの素晴らしい冒険への扉を多くのお客様に提供していくことができるようになれば、これほど喜ばしいことはありません。加えて、三橋選手のチャレンジを通じ、我々が自信を持って日本のお客様に提供している、アドベンチャーシリーズをはじめとした豊かな商品群の信頼性と、魅力がさらに強く伝えられることになると確信しています」と述べています。

メディア関係者各位

この件に関するお問い合わせ： KTM JAPAN 株式会社 担当：野口

* オフィシャルフォトの提供も可能です。併せてご連絡いただけるようお待ちしております。

〒135-0063 東京都江東区有明 3-5-7 TOC 有明 2F

TEL: 03-3527-8885 FAX: 03-3527-8890 HP: <http://www.ktm-japan.co.jp/>